

体験的中国医療事情

= 私の脳梗塞 in 上海 =

沼 敬

《筆者略歴》

ぬま たかし。1947 年高知市生れ、昭和小/高知大附属中/学芸高を経て京都産業大学経済学部学ぶ。1970 年卒業と同時に三菱商事入社、2003 年 3 月準定年退職まで 33 年間勤務。本店東京/大阪支社勤務の後、台湾で 1 年間北京語研修、広州/上海/南京各事務所を歴任。上海浦菱儲運有限公司出向を最後に準定年退職。2003 年 7 月高知県上海事務所初代首席代表就任、2007 年退任し岡本光学科技（蘇州）有限公司総経理就任。2010 年三菱商事（上海）有限公司上海万博担当就任、上海で脳梗塞発症後退職。現在生家にてリハビリ中。【2011 年夏記】

一、脳梗塞発症

それは突然の出来事でした。

2010年10月25日の月曜日、腕時計の針は午後2時を少しばかり回って居たと思います。当時私は中国の上海に在って、高知に縁の深い財閥系総合商社三菱商事の現地法人で嘱託勤務をして居り、上海万博視察の為来訪する社内/外のVIPを接遇するのを専門とする仕事に就いて居ました。勿論ご多分に漏れず単身赴任の身でした。

万博閉幕まで余すところ後一週間となった此の日は、会場には入らず朝から会社の事務所で、前の週の週報を作成して居たのです。実は1週間前の10月16日の土曜日には、中国安徽省蕪湖市との友好25周年記念高知市民訪問団と共に訪中した岡崎市長ほかの高知市行政訪中団ご一行を、ちょうど万博会場内へご案内するという機会があったばかりで、しかもその日は1日の入場者数が103万人を数え、万博史上最高記録を達成した日でした。其の様なトピックスで、書き上げた週報を締め括り、電子メールに添付して東京の本社宛に送付すべくPCの発信キーを叩いた直後の事でした。

右手に力が入らず突然マウスが動かなくなり、あれっと思い、何気なく両手で眼鏡を外そうとしたところ、その右手が顔まで上がって来ません。どうしたのかな？と気になったので、周りに気付かれない様にそっとトイレに立ち、鏡を見たりして居る内に、その間の時間で言えば20分ぐらいただと感じましたが、その症状はすっかり影を潜め、まるで何事も無かったかの様に元の状態に戻ったのです。従い、躊躇する事無くまた仕事に戻り、再びPCのキーを叩き始めました。

ところが、そうこうする内に2時間ほどが経過し、4時過ぎになった時点でまた同じ症状が現れ、流石に私も只事では無いと異常を感じ、総経理(=社長)の部屋に駆け込んで助けを求めました。其処で行われて居た会議は直ちに中止され、総経理の陣頭指揮下で緊急対応が始まり、先ず会社が契約して居るグローバルネットワークの救急医療保険会社に連絡、救急車の手配をしようとしてしました。が、市内の交通渋滞の為会社到着までに40分以上かかる事が判明、仕方無く次善の策として社有車使用に切り換え、私自身が椎間板ヘルニアで治療実績の有る上海華東医院の外国人専用病棟に担ぎ込まれました。とは言え、意識は比較的はつきりして居り、会話や歩行もさほど困難では無かった事から余裕綽々、途中の車中では当日夜の上海在住高知出身者との会食キャンセル通知を初め、緊急を要する連絡先の選択と其処に対する連絡内容を自ら携帯電話で同僚に依頼するなど、私自身の頭には、事の重大性に対する認識は一かけらも有りませんでした。

そして高架道路の酷い交通渋滞の中、かれこれ1時間ほどで病院に到着。この慢性的な交通渋滞と、「自分が交通ルール」と言わんばかりの運転をする上海のドライバー常識を考えると、何れにせよ料金を請求される「120番」(註:救急車、119番は消防車のみ)を利用せずとも、一刻を争う緊急時でさえ病院着の時刻は大差無いと言うのが、勿論現場を良く知る現地の判断なのです。脳梗塞に限らず病院に行く迄の時間は大変大事

な事なのですが、それよりも病院で、如何に迅速で手際良く的確な処置を得られるか？の方が、中国ではもっと重要な事なのです。

病院で整った医療設備の下、画像診断（CT/MRI）を始め各種の必要な検査を終え、実際に治療に取り掛かった時には、既に陽はとっぷりと暮れて居ました。

二、駐在員生活

私の合計約 18 年に亘る中国での駐在員生活の過程で、実は何度も病院のお世話にはなっています。とは言え普段は全く健康で、週末にはゴルフをするなどして運動不足を補い、たまに発熱や下痢或いは風邪気味と言った場合でも、日本から持参した売薬で殆どが事無きを得て居り、不注意や事故に依る怪我、流行性の疾病に対する注意を怠る事の無い様に心掛けて居れば、病院のお世話になる事は先ず有りませんでした。

駐在した都市は広州/上海/南京/蘇州の 4 ケ所で、香港/マカオ/台湾を含め中国全土を出張或いは観光で隈無く回り、未踏破(註:通過はしても宿泊はしていない)の省/自治区は僅かに 4 ケ所、吉林省/河北省/青海省/チベット自治区を残すのみとなって居ます。到達点の最北端は黒龍江省の黒河市(註:黒龍江を挟み、対岸はロシア)、最南端は海南島の三亜市(註:東洋のハワイと呼ばれるリゾート地)、最西端はキルギスタンへの通り道パミール高原の麓カラクリ湖、最高到達地点は富士山より高い海拔 4 千米を越す雲南省は玉龍雪山。他にもアンチモン鉱山の狭い地下坑道を切羽まで、山中に隠された要塞の如き製鉄所、まるで時間が止まって居るのでは？と錯覚しそうな少数民族居住区 etc、etc ……。

その様に、医療設備や体制が整って居る駐在地を離れる場合には、多少の常備薬は携行するものの、前記の如く椎間板ヘルニアの持病を抱える私としては、例えば灼熱の砂漠の中を走行中、はたまた濃霧の断崖絶壁での行き違いなど、長時間の狭い車中では居眠りなどせず、慎重に体の位置を変えるなど、無医地区でヘルニア地雷(?)を踏まぬ様、旅先では常に細心の注意を払っていました。それでも天津のホテルや、貴州省の奥地で有名な「黄果樹」と言う瀑布(註:全国至る所の国有企業の応接室または会議室には、何故かこの風景画が贈呈を受けて掛かっている)での発症など、西洋で言う「魔女の一撃」の不意打ちを喰らって居ます。従い、私にして見れば脳梗塞の発症は、それこそ全く「想定外」の出来事だったので。

中国で、我々日本人が、医療機関に行かなくてはならない事態に陥った場合、常駐者であるか旅行者であるかに関係無く先ず探さなければならぬのは、外国人専用の病棟を持つ病院です。中国では、外国(人)と接触する事を「外事」と呼び、その特別な「外事」の許可を、政府から得て居る場所のみ外国人は安心出来るのです。今の中国では何でも自由で、表面上その様な気配は全く見えなくなっていますが、その実その体制はしっかりと残って居ます。都市部以外では、若しその土地の外事弁公室に特別のコネが有

れば、共産党幹部専用病棟がお薦めです。

病院が決まれば、次は言う迄も無く現金を用意する事です。最低でも 2000 人民元(=ほぼ大卒の事務職初任給手取り額)を持参しましょう。中国の医療費の水準は、日本に比べてそれ程高くないのですが、若し入院する羽目に陥った場合入院保証金が必要だからです。2003 年の SARS 騒ぎの際には、怪我で病院に行っても検温で 38 度を超えたら即入院/隔離でした。更に携帯電話、日本の様に院内設置の公衆電話は有りません。そして付き添い人ですが、通訳が出来る事が望ましい事は言う迄も無い事です。外国人専用病棟内で英語を解するスタッフは多く且つその語学レベルは相当高いのですが、それに引き換え日本語堪能者は人数もレベルも可成り落ちると言わざるを得ません(がプライド丈は極めて高いのです)。

三、中国の医療事情 ～～ 国情の違いを理解する ～～

上海で執務中に脳梗塞を発症し病院に担ぎ込まれた訳ですが、私の場合は第一章で書いた様に、会社が契約して居るグローバルネットワークの救急医療保険会社に依って、全ての費用が病院に対し支払われる事が保証されて居ました。従い、個人的な買い物などを除き一切の費用を支払う必要が無かったのですが、逆にその請求明細も見る機会は無く、例えば救急車の費用や初診料が幾らだとか検査/点滴/投薬/個室費など凡そ入院治療に掛かる金額も、それを知る術は有りませんでした。

一般的に中国の邦人駐在員の、家族を含めた現地医療費(註:売薬購入などを含む)は、日本での国民皆保険制度が適用外で有る事から、出産関連や歯科治療を除き一般的に会社が全額負担してくれるケースが多い様です。即ち、立替えた医療費の「公的領収書」(註:中国語で「發票」と言う。請求書を兼ねて居り、所有権の移転を証明出来る唯一の帳票。此れの発行を以って経理帳簿への記帳が可能になる。再発行不可。)を基に、会社宛に請求する訳です。また、日本の損保会社に依る海外旅行傷害保険を期間 1 年で付保し、駐在期間の延長に沿って毎年更新して行く方法を採用するケースも有ります。北京/上海/広州など大都市の外国人専用病棟では、此の保険証提示に依りキャッシュレスサービスが受けられます。ただ難点と言え、例え海外とは言え「旅行中の応急措置」と言うのが旅行傷害保険の建前ですので、同一病院で同一傷病名での診療期間が連続して半年を越えるなどの場合は、保険会社から保険金が下りない可能性が高く、途中で病院の方からその保険での治療を打ち切られる場合が有る事です。

何れにせよ病院に行った際の手順は、特に旅行者は予め日本円やトラベラーズチェックを現地通貨の人民元に両替して置く要有りですが、先ず受付で自ら積極的(註:他人を押しつけてでも)に病状を詳細に説明しなければなりません。中国には日本の様な整然と/静粛に/辛抱強く並んで順番を待つと言う習慣が有りませんので、病院側の対応も同様に、我先にと目の前に現れたものから適宜処理して行きます。患者の自己申告に基づ

きカルテ(註:中国語で「病歴」と言う、病院保管では無く患者保持、勿論中国語)が作成され、診察券と共に手渡されます。そして空いて居る医師名と診察室が告げられますので、先ず会計に行き診察料などの支払いを済ませ、発票を受け取って置かねばなりません。外国人専用病棟の場合は、特別な場合を除き混雑して居る事は有りませんので、普通静寂が保たれて居ますが、一般の病棟では患者に付き添いが加わり、混雑と喧騒状態の中で、動けない/話す元気も無い患者の代わりに番取りや支払いに東奔西走する付き添いの存在が、それこそ大変重要な意味を持つのです。

診察室で医師は、兎に角患者や付き添いに病状を喋らせてそれをひたすらカルテに書き込む丈で、患者や付き添いの不安を和らげる様な対応は無く、症状に適した処方箋を機械的に発行します。そして其の処方箋を持って又もや会計へ行き、激痛が走って居てもじっと歯を食いしばり、支払いを済ませて発票を握り締め、点滴ホールや院内薬局へと急ぎます。点滴ホールでは、横たわる事は無く、発票に基づいて点滴薬が体にセットされ、何十席も有る大きなホールの中を自分で歩いて空いて居る椅子を探し、上に張り巡らされた針金に引っ掛けて点滴をします。当然此处でも付き添いが大活躍です。採血や静脈注射は別途専用の「窓口」に行き、自ら腕を突っ込んで打って貰います。勿論発票に依る支払確認後で有る事は言う迄も有りません。

中国の病院に不慣れな日本人にとっては、専用病棟の存在は大変有難いのですが、それでも「日中の国情の違い」はどうする事も出来ず、病院での意思疎通には通訳の存在が大きくものを言います。

四、いざ、治療に

病院には救急車を呼んだのではなく会社の車で行った事から、病院の駐車場から自分で歩いて外国人専用病棟に向かいました。勿論会社の同僚と日本語を解する中国人社員が、事務所からずっと付き添ってくれて居ました。

受付に到着すると、保険会社の日本語を話す担当者が待って居り、煩わしい入院手続きを殆ど終え、私の受け入れ体制は既に整って居ました。私は還暦も過ぎて居るし、特に中国に在って、不測の事態に備えてパスポートと多少の現金と共に、治療実績の有る現地の病院の診察券とカルテを常時携帯する様にして居ます。今回も、またそれが大いに役立ちました。病院に着いても吐き気や頭痛など特に気分が悪いと言った事も無く、意識も割とはっきりして居り、自分では多少呂律が回らない様な気もしましたが、医師や看護師との遣り取りも通訳を介して、概ね問題無くこなしました。私は、中国語に関して言うと、38歳の時に三菱商事の社命に依り家族と離れ、台湾に語学研修生として1年間派遣され、その後約18年に亘る中国大陸での駐在員生活を通じ、仕事上は勿論生活上でも、余り差し障りが有るとは自分では感じませんが、流石に医療用語など専門性の高い使用頻度が低い言葉は苦手な、矢張り通訳のお世話になる事にして居ます。

此の日、最初に異常を感じてから、病院に運ばれ画像診断(CT/MRI)/心臓血栓/頸動脈血栓など必要な検査を全て終え、左脳の神経が脊髄に向かって集束して居る複雑で微妙な箇所の血管が、割と広範囲に梗塞を起こして居るので今からその治療を始めるとの説明を受ける迄、既に相当の時間が経過して居たと思われます。

担当女医との遣り取りの場面を土佐弁に翻訳して再現してみましよう：

(医)「直んぐに治療にかかるき、ええかね、これから注射を打つきこれ(註:同意書)に名前を書いてや」

(私)「何の注射ぜ？」

(医)「血管が詰まっちゅうき其処を溶かすが」

(私)「良し解った、けんどたかが注射ばあの事で同意書は要らんろう、もう右手も利かんき字も書けんが」

(医)「いやあ、ようだい言わんと、兎に角早よう打たな治らんちや、この注射は今世界で一番効くがやき、へんしも名前を書かんと！」

(私)「名前を書くがにたいて拘るがどういて？」

(医)「後で血管が破れて穴が開くかも知れんき、ほいたらお互い困るろう？」

(私)「何つぜよ、そんな怖いがああしゃあ打たん！他にやり様は無いかえ？」

(医)「有るけんどこれが一番効くがやき、早ようせんと間に合わん様になるちや！」

この辺りから保険会社の通訳氏の日本語が怪しくなり、意味不明の説明を繰り返すばかり。それで私も不安を覚え出し、到々自分で直接女医さんと中国語で(註:共通語たる「普通語」で、それ迄は上海語だったので全く理解できず)遣り取りを始めました。話は又振り出しに戻り、可成り時間を費やして一通り繰り返した後：

(私)「けんど血管が破れるがやろう？」

(医)「他のやり方やったら後遺症が残るがかまんかね？」

(私)「どんなが？」

(医)「麻痺よね、麻痺！」

時間が経つに連れて、何と無く意識も朦朧として来たと感じ始めた頃、会社の同僚が「早く決めた方が・・・」と背中を押してくれたので、最終的にその注射を打つ事に同意し、サインはその同僚に代理を頼みました。然し、代理行為を拒否する女医さんとの押し問答の末、結局代理はダメとなり、もう右手が使えなくなって居たので震える左手で何とかサインをしました。注射を打ち終えた女医さんは、「はい此れで没問題(註:中国人の常套言葉、問題無いと言う意味だが、実際は問題有る事が多い)、後遺症も残りません！」との言葉を残して意気揚々と引き上げて行きました。

病室に移ったものの落ち着かず、猛烈な睡魔に襲われましたが、このまま眠ってしまったらもう二度と目が開かなくなるのでは？との不安に駆られ、会社の総経理が心配し様子見に訪れた頃まで、それこそ必死で眠気に耐えて居ました。とは言え矢張り眠ってしまったと見え、気が付いた時には、会社の総経理が自ら日本に居る私の家族に、電話で事情を説明してくれて居り、不意を打たれて驚く家族が事態に対し冷静沈着に即応出来る様、懇切丁寧にリードしてくれて居ました。

五、血栓溶解療法

当時私はご多分に漏れず、家族を日本に残して単身赴任の身でした。それ迄日本で東京や大阪に転勤した時は言うに及ばず、中国でも駐在員になった当初から家族を帯同して居りましたが、高校に上がる年齢になった子供の教育の事を考えて、その後家族を日本に返し以後単身生活になりました。それは1998年5月の南京からですので、中国での単身貴族生活も10年を越えた事になります。

第一章で、高知市と中国安徽省蕪湖市との友好25周年記念市民訪問団の事に少し触れましたが、実はその訪問団の一員として私の家内が久しぶりに上海を訪れて居り、10月16日に私が高知市行政訪中団を上海万博にご案内した際、一緒に会場入りして居たのです。更に、この16日が私達の34回目の結婚記念日で有った事から、翌17日の帰国を控え、万博会場内の日本企業8社に依るパビリオン「日本産業館」内に特設された超高級料亭「むらさき」にて、会社の総経理ご夫妻と4人で記念の会食を楽しみ乍ら上海最後の夜を過ごしました。それが何と高知に帰って一週間程で、思いも掛けない上海からの突然の電話、しかも夜間に(註:時間差は1時間)三菱商事(上海)の総経理から。吃驚しない筈が有りません。自分の耳を疑ったと言いますから、家内にとっても全くの「想定外」だった訳です。早速翌日から東京の三菱商事本店との間で緊急渡航の打ち合わせが始まり、10月30日に取り急ぎ上海に迎えに来てくれました。勿論三菱商事も緊急対応と言う事で、本店総務部が間髪を置かず1名を、現地対策要員として翌日のフライトで派遣してくれて居ます。

上海華東医院の女医さんが、「これで後遺症も残りません！」と言い残して意気揚々と引き上げて行ったのですが、打ったその注射は実は血栓溶解療法薬<t-PA>だったのです。確かに世界で一番効くのは間違い無い様ですが、帰国後診察を受けた東京の済生会中央病院でも高知の近森リハビリテーション病院でも、一様に「え〜っ、t-PA？」と驚かれました。理由は二つ。一つ目は、日本でも2005年になってやっと認可されたのに、それが中国にもt-PAが有ると言う事、二つ目はそれを打ったと言う事。t-PAを最も効果的に使い脳梗塞を軽症で収めるには、例えば発症から遅くとも3時間以内に治療を開始する(註:検査時間を考慮すると病院到着は2時間以内)とか、画像所見以外にも既往歴/臨床所見/血液所見だとか諸々の厳しい前提条件が有り、日本では実績として

患者の 2-3%にしか使われて居ないとの事。案の定私が目を覚ました時には、脳出血こそ起こして居なかったものの、まあ見事に(?)右の片麻痺が起こって居り、上肢/下肢共にずしりと重く、最早ビクとも動かない状態になって居たのです。

中国では、一流のやり方を学び、一流のものを、一流の道具を使ってすれば、その結果は必ず一流であると言う考え方が有り、経験や伝承或いは臨機応変と言った、所謂ノウハウと呼ばれる領域に属する事は意外と軽んじられて居ます。また、個人のプライドが高く、何よりも自身の面子を重んじます。恐らくこの女医さんも、発症からどんどん時間が経って行く過程で、自分は有名医学部出身/患者は日本人/画像診断実施/脳梗塞/t-PA 使用と言う、それこそ空白さえ埋めたら模範回答に成る好事例に遭遇し、それをやり抜いて自己満足に満ち溢れ、そして意気揚々と引き上げて行ったのは想像に難くないと思います。片麻痺の後遺症が残ったのは、医者と言う事を素直に聞かぬなど患者側の原因に依る結果論で有り、お気の毒様、せいぜい「康復鍛錬」(=リハビリテーション)を頑張ってくださいと言ったところでしょう。

何れにせよ私は、ある時期から、ある程度の覚悟が出来て居ました。何の覚悟かと言うと、実は私の父親は 49 歳の時に脳溢血で死去して居り、同じ様に連夜の「理由無き酒盛り」を愛した私も、遅かれ早かれ同じ病に見まわれるだろうから、例えば塩分控え目だとか、せめて高血圧症への予防だけでも人一倍気を付けて居ました。然し、中国に常駐する限り、全般的に濃厚な味付けの中華料理の世界では、自炊のおかず以外は「酸甜苦辣」(註:全ての味、転じて様々な経験の意)の美味しい宴会料理の機会ばかりで、食事制限どころか「黄酒」(註:醸造酒、老酒とも言う、紹興酒が有名、15 度前後)と共にアルコール度のキツイ「白酒」(註:蒸留酒、茅台酒が有名、最低でも 38 度、60 度を越すものも有る)が料理に合うところから、どうしても自己抑制が疎かになります。

早速その晩から私には、保険会社の手配で、泊まり込みの「阿姨」(=付き添い、アイと言う)いが来てくれました。

六、入院生活から帰国へ

上海華東医院の外国人専用病棟は、5 号館に在る「特需医療部」の一部として、一般病棟とは別棟になって居ます。私の病室は一人用の個室でした。広さは見た感じでホテルのシングルルーム程度(註:中国では通常ツーベッド)ですから約 30 m²。室内には薄型壁掛け液晶 TV、小型冷蔵庫、サイドボード、丸テーブルに肘付き椅子 2 脚、それにシャワー室兼トイレ、折り畳み式ソファベッド、ロッカーと言ったものが備わって居り、部屋の内装も含め、外見は日本と遜色は有りません。私は当然ベッドに寝たきりで動けないので、自分でそのトイレに行く事すら叶いませんでした。

病院のアイさんも、一般的に「農民工」と呼ばれる出稼ぎ貧農で、布団などの生活用品一式を病室のロッカーに押し込み、病室をホテル代わりに転々と、文字通り住み込み

の付き添いとして、病院に認可された口入れ屋により、個人や保険会社などの依頼を受け斡旋されるもので、一応制服姿で患者の食事/排泄/身体拭い/着替え/洗濯など身の回りの世話をしてくれます。私に付いてくれた張さんと言う中年女性は湖南省から来たとかで、中学生の子供を両親に預け、夫とは別々の出稼ぎ生活は既に 2-3 年との事。日本語を解するどころか高校すら出て居ない様で、私が見る TV のニュースには余り関心を示さず、私が眠って居る間にドラマを見ると言った具合でした。夜中に寝返りを打てない私の体の向きを何回も変えてくれたり、尿/便器を持ってトイレとの往復など、慣れて居るとは言え流石に昼間は疲れで居眠り。まあ全般的に大変良く世話をしてくれましたので、そのくらいは理解してやらねばと思います。

入院翌日にはもう点滴が外れましたので、早速病院食が始まりました。最初 2 日間は流動食、と言っても毎回ドンブリに山盛り、可成りの確率で普通食をミキサーにかけた丈のもの。普通食になってからは、その量の多い事に閉口、矢張り食事を大事にするお国柄、しっかり「丼飯に一汁三菜」でした。更にオートミルの様な間食が 1 日 2 回、流石に夜食は有りませんでした。私は麻痺の影響で唇の右半分に違和感を覚え、食事の度に上唇を歯で噛むので、仕方無く使える左手の指で上唇をめくり上げ、アイさんに食べさせて貰って居ました。中華料理では、客は食べ残すのが礼儀では無かったのでは？とアイさんに問いたくなる程、ベッド上の小卓に乗ったものは、残らず私の口の中に入れてくれました。

普通食をとる様になると、突然療法士が現れリハビリを始めると宣告。件の女医さんは、「白い巨塔」宜しく毎朝看護師を従えての大名回診の際も、私の治療プランなど一切説明せず、アイさんと共に毎日病室に詰めて居る保険会社の通訳嬢も何も言わないので、結局また私が自分でその療法士とリハビリの時間などの確認をする羽目に。幸いにも記憶/知能/思考/言語/知覚などに障害が見られ無かったのは何よりでした。リハビリは、ベッドに横臥したままの状態で行い、麻痺側の上/下肢をただ動くかどうか確認する丈の様に感じました。1 回 20 分程度で、勿論週末は休みだし、平日療法士が都合で来なくても、それを誰も知らせに来ず当然ピンチヒッターも来てくれませんでした。その癖、急性期の間断無きリハビリが重要とは、正に良く言ったものです。ただ、膝から下をスッポリ包むまるで機動戦士ガンダムの様な形状の装具を、無理矢理着けさせられました。それは、足首が斜めになったまま固まり、立て無くなるのを防止する目的との事でしたが、靴擦れが酷く、直ぐ自分勝手に取り外しましたが特に問題にはされませんでした。どうも日本では、一昔前の遺物の様な装具だそうです。尤も、病院側が治療プランを示さ無いのは、私が一刻も早く帰国し、日本での治療/リハビリを強く希望した事に拠るかも知れません。

一方、私が入院した事は、病名を含め、私の意向でもあり会社として暫くの間対外的には公表しない事になって居ましたが、実は私の知らない所で、一寸した事件が起こって居たのです。上海でお店をやっている高知の方とずっと家族ぐるみのお付き合いをし

て居ますが、会社がその方にも事情を詳しく説明しなかった事から早合点され、知り合いの北京日本大使館員経由で、内々上海市公安局に対し、若しや私が拘束されて居るのでは？等と安否確認を行ったそうです。勿論後でその事を知り、お互い大笑いした事は言うまでも有りません。

と言った様な入院生活でしたが、別段気になる症状も無く、血圧が多少高め乍らも数値が安定し始めた段階で、退院帰国の許可が出ました。但し、医師の同行が無ければ、日本の航空会社も病人の搭乗を許可してくれません。担当女医は、あっさり興味無しと辞退し、代わりに訪日経験の無い若手女医が喜々として名乗りを上げ、11月6日の羽田行き全日空便での帰国が決まりました。家内が、引越荷物整理を含め、私に代わり帰国に際しての諸々の作業を行ってくれ、更に空港での出国審査や日本での入国審査手続きまで代行する(註:私は出入国審査を通過せず)など、只でさえ精神的疲れを覚えて居るのに、益々大きな負荷を掛けて仕舞い、只々感謝するのみ。

道中は車椅子を使用せず、日本の病院までの Door to Door はパジャマ姿の担架で。機内では、日本から6座席を占用して特設してあった簡易ベッドに固定され、全く身動きが取れない状態で3時間弱の我慢フライト。国際線が復活したばかりの羽田空港で、何と担架で帰国の第一号と言う話題提供のオマケ付きでした。暮れなずむ東京は三田の済生会中央病院に到着し、目の前の大きな東京タワーの逆三角形の姿を救急車の中から見留めた時、やっと生きて日本に帰って来られたと言う安堵の実感が、沸々と湧いて来るのを覚えました。上海から付き添ってくれた女医さんと保険会社の通訳嬢は、女医さんの流暢な英語に拠る私の診断書(註:原文は中国語)読み上げを引継ぎ代わりにして、翌朝の帰国までの貴重な日本初体験を謳歌する為、いそいそと病院を後にして行ったのです。勿論機内簡易ベッドの費用も(註:6人分往復航空運賃)女医/通訳の渡航費用も全て保険でカバーされて居ます。

今日本に在って、「私の脳梗塞 in 上海」がまるで走馬灯の如く頭に浮かんで来ますが、帰国後のリハビリの効果を自覚する度に、私はそれが実に不思議な気がしてなりません。中国ですから色々有りましたが、結果として幸い脳出血も起こらず、却って日本人として同胞に伝えたい貴重な体験と成った事は事実です。あの時こうして置けば予防できたのとか、軽症ですんだのに等と思考を後ろ向きにせず、現状肯定をベースに前向きに歩んで行きたいと考えて居ます。

高知県でも、国際観光推進元年と称して、外国人特に韓国/台湾/大陸からの観光客誘致に力を注いで居ますが、来高の彼ら/彼女らが、不意をつかれて思いがけなく異国で怪我や病気になった際、ハード(=外国人専用病棟/食事など)と共にソフト(=外国人の生活習慣に通じて居る、外国語に拠る意思疎通など)が整って居れば、外国人はそれ丈で癒され、其の事が高知の隠れた大きなセールスポイントになるのだろうと、その早やからん実現を只ひたすら願う次第です。(完)